

「はむらの授業指針」教師の視点①

主体的な学びがある

① 「主体的」であって「自主的」ではないことに留意する

「主体的」という用語を理解するには、似た意味をもつ「自主的」との差異に注目するとよいでしょう。「主体的」とは、なすべきことを自分で決めて行うさまを指します。一方の「自主的」は、既に決まっていることを、他人から指示される前に率先して行うことを言い表します。

家庭学習で言えば、宿題の多くは自主的に行い、夏休み中の独自の研究、定期テストや入学試験に向けた学習等は主体的に行うことになります。



② 子どもが自己決定する場面を設定する

現代社会は、グローバル化の進展や目覚ましい技術革新により急速に変化し続け、予測困難な状況にあります。このような時代を生き抜くためには、様々な変化に積極的に向き合い、自己の課題を見付け、その解決の方法等を工夫・決定しながら学び続けることが重要です。

授業を構想するに当たり、子どもたちが複数の選択肢から、学習の課題や内容、方法等を選択・決定しながら学ぶ、そうした場面を設定することが、主体的な学びの実現につながります。

人の上に立つ人

京セラ名誉会長、KDDI 最高顧問、日本航空名誉顧問 稲盛和夫

人の上に立つ者には才覚よりも人格が問われる。人並はずれた才覚の持ち主であればあるほど、その才におぼれないよう、つまり、余人にはない力が誤った方向へ使われないようコントロールするものが必要になる。それが徳であり、人格なのだ。

出典：「稲盛和夫一日一言 運命を高める言葉」（稲盛和夫著 致知出版社）

※ いかなる組織においても、徳に基づく経営が求められていると考えます。